

「日本の諸宗教－研修と対話－」プログラム

NCC宗教研究所 研究員 寺本知正

1. 活動の目的

ヨーロッパの将来の宗教指導者となる学生が、多宗教環境の先駆者である日本の宗教的環境に身を置き、日本の諸宗教を学ぶことで、体験と知的学習を通じて宗教間の相互理解を深め、将来、ヨーロッパにおける諸宗教間の相互理解におけるリーダーシップをとることのできる教育を与えることを目的として2002年に開講されたNCC宗教研究所の「日本の諸宗教－研修と対話－」プログラムは、すでに5年の実績を持つに至った。このプログラムは、諸宗教に関する講義と研修とによって構成されるが、この間、一方の柱である講義に関しては大きな実績を示してきた。各々の諸宗教を専門とする講師陣が、専攻は神学、宗教学、教育学にわたり、またレベルは学部生からポスト・ドクター生、すでに聖職者として奉職する者にいたるまでの多彩な留学生に対応した講義を実施した。

しかしながら、講義による他宗教の知的学習の進展は、宗教間相互理解のための重要な基盤であり、出発点ではあるが、終着点ではない。プログラムの他方の柱である研修は、宗教間対話が実際に経験される機会であり、各々の留学生にとっては、他宗教に問いかけ、また他宗教から問いかけられる中で、自らが試され成長していく貴重な機会である。このような研修の更なる充実こそが、宗教間相互理解のための指導者を育成するのである。宗教間の更なる対話と交流を促進して、宗教間相互理解のための指導者を育成することが、当活動の目的である。

2. 活動の内容と方法

プログラムは、半年間を一学期（セミスター）としたプログラムである。このプログラムは、基本的に、日本の諸宗教に関する講義と、各宗教教団における研修とによって構成される。その講義とは、「日本の民俗宗教と神道」、「日本の仏教」、「日本の新宗教」、「日本のキリスト教」、「対話の神学」、「仏教テキスト講読」、であり、全講義とも各分野の専門家が英語によって講義する。また、語学学習として、「日本語」の講義も設ける。

各宗教教団での研修は、関西圏に本山・本部を持つ教団には講義期間中に訪れ、関東圏および東北・九州などの遠方地へは、講義期間外の研修旅行期間に訪れる計画である。研修における更なる対話の機会を得るため、プログラムでは新たに3点の活動に比重を置く。(1) 各教団での研修では、教団の施設、儀礼、教義の紹介を戴くとともに、信徒の方々との交流の機会を設け、更なる対話の機会を得る。(2) 京都・宗教系大学院連合〈KGURS〉に属する諸大学の大学院生との交流会を大学ごとに講義期間中に実施する。(3) 講義期間後には、全国の宗教施設や社会福祉施設における長期研修を実施する。

2007年度秋学期のスケジュールは、2週間のオリエンテーション期間を設け、その後に

各講義とも全10週間の講義を実施する。期間中には、研究所主催のセミナーへの参加、プログラム特別講義、および諸宗教の人を招いての交流会も実施する計画である。講義期間終了後、関東圏への研修旅行、および宗教施設・社会福祉施設研修を実施する。

3. 活動の実施経過

(1) 運営委員会の実施

プログラムの運営は、運営委員会が、予算・決算、講義カリキュラムの承認、学生の受講承認などの通常重要事項を、会議によって審議・決議する。また、プログラム実施上にその時々問題となる事項も、同会議によって審議される。運営委員会は、アドバイザーおよびエグゼクティブによる二委員会制から一委員会制へと改められた。

運営委員会メンバー

府上征三（日本基督教団洛陽教会牧師）
藤本浄彦（仏教大学教授）
林 忠良（関西学院大学名誉教授）
樋口 進（関西学院大学教授・NCC宗教研究所理事）
片柳栄一（京都大学教授）
前島宗甫（元日本キリスト教協議会総幹事）
宮庄哲夫（同志社大学教授）
水垣 渉（京都大学名誉教授）
水谷 誠（同志社大学教授）
中道基夫（関西学院大学准教授）
高田信良（龍谷大学教授）
幸日出男（同志社大学名誉教授・NCC宗教研究所前所長）
ペテロ・バーケルマンス（オリエンズ宗教研究所）
ロバート・ローズ（大谷大学教授）
マルティン・レップ（龍谷大学教授・NCC宗教研究所副所長）
寺本知正（NCC宗教研究所研究員・プログラム事務担当）

2007年度秋学期の運営のための運営委員会会議は、2006年1月、2007年6月および7月に開催され、応募学生の承認やカリキュラムの構成、予算などの諸事項が審議された。プログラムに応募した6名の学生の中から、応募理由などを検討した結果、4名を受け入れることと決議された。また学期中には、計2回開催され、進行中のプログラムに関する諸事項が審議され、決議された。

また、カリキュラムの講義内容とスケジュールおよび実地研修・研修旅行のスケジュール構成に関して、各講師と運営委員による詳細な調整が行われた。

通常審議事項の他に当年度に審議され決定された事項に大きなものが二つある。一つには、京都・宗教系大学院連合に属する諸大学の大学院生との交流会を大学ごとに講義期間中に実施することであり、一つには、講義期間後に、全国の宗教施設や社会福祉施設における長期研修

を実施することである。

(2) プログラムの実施

2007年秋学期には正規受講生4名を受け入れ、9月27日よりプログラムが実施された。

(3) レセプション

2007年秋学期では、学生を歓迎するためのレセプションが、運営委員会主催で開催された。NCC研究所理事を招待し、2007年9月28日に開催された。

(4) 特別講演

各セミスターでは、学生の歓迎およびプログラムの外部への貢献を趣旨とした、公開特別講演が、運営委員会主催で開催される。2007年秋学期は、11月28日に当プログラム運営委員でもある藤本浄彦氏（仏教大学教授）による講演「宗教のことは・私考一境界線上に立つこと、翻訳すること」が開催された。

(5) プログラム参加学生

2007年秋学期には、正規受講生として4名が参加した。

《プログラム正規受講学生》

ドイツの大学から4名の学生が、プログラムを正規受講した。

- (1) 女性、ドイツ人。ドイツ・ハンブルグ大学で日本学、神学および考古学を専攻。
- (2) 男性、ドイツ人。ドイツ・ハイデルベルク大学およびアウグスタナ神学校で神学を専攻。
バーデン州教会会員。
- (3) 女性、ドイツ人。ドイツ・ハイデルベルク大学で神学を専攻。
- (4) 男性、ドイツ人。ドイツ・チュービンゲン大学で神学を専攻。バイエルン州ルター派教会会員。

(6) 講義の実施

セミスター準備期間において、担当責任講師と実行委員による詳細な講義計画が立てられた。各講義においては、各担当責任講師が講義を担当するとともに、専門領域に関しては他の講師を依頼して各講義全体のコーディネートも担当する。

各講義では、専門性の高い領域に関して、新たに専門講師を迎えることができ、より充実したカリキュラムを実施することができた。また、プログラム開設以来「諸宗教の神学および諸宗教間対話」を担当してきたヤン・ヴァン・ブラフト神父の逝去に伴い、同講義が再編された。新たな講師は以下である。

・日本のキリスト教

- 岩野祐介（京都大学）
- 茂 洋（神戸女学院大学名誉教授）
- 浜屋憲夫（日本聖公会司祭）
- 高柳俊一（上智大学名誉教授）

・日本語

- 有本忠雄（元NHKアナウンサー）

① 講義日程

≪2007年度秋学期≫

オリエンテーション期間

2007年9月27日～10月8日

講義期間

2007年10月9日～12月15日

② 講義カリキュラムおよび講師

≪2007年秋学期≫

〔日本の民俗宗教と神道〕

担当責任講師：ペトロ・クネヒト（前南山大学人類学研究所教授）

日本の民俗宗教と神道（10講義時間）

講師：ペトロ・クネヒト

〔日本の仏教〕

担当責任講師：ロバート・ローズ（大谷大学教授）

日本仏教入門および奈良時代から鎌倉時代の仏教（6講義時間）

講師：ロバート・ローズ

日本の禅仏教（2講義時間）

講師：トーマス・カーシュナー（天竜寺僧侶）

日本の近代仏教（1講義時間）

講師：寺本知正（NCC宗教研究所研究員）

まとめ（1講義時間）

講師：ロバート・ローズ

〔日本の新宗教〕

担当専任講師：マルティン・レップ（龍谷大学教授）

日本の新宗教（10講義時間）

講師：マルティン・レップ

〔日本のキリスト教〕

担当責任講師：幸日出男（同志社大学名誉教授）

日本のキリスト教概論（2講義時間）

講師：幸日出男

キリシタン史（2講義時間）

講師：東馬場郁生（天理教校講師）

日本のプロテスタント史（1講義時間）

講師：岩野祐介（京都大学）

日本聖公会史（1講義時間）

講師：浜屋憲夫（日本聖公会司祭）

現代日本のキリスト教（2講義時間）

講師：茂 洋（神戸女学院大学名誉教授）

日本のカトリック（1講義時間）

講師：高柳俊一（上智大学名誉教授）

〔対話の神学〕

担当責任講師：水垣 渉（京都大学名誉教授）

対話の神学（9 講義時間+ 1 シンポジウム）

講師：水垣 渉、マルティン・レップ、横田俊二（京都女子大学教授）、
安永祖堂（花園大学国際禅学科教授）

〔仏教テキスト講読〕

担当責任講師：マイケル・パイ（大谷大学客員教授・マールブルク大学名誉教授）

『法華経』講読（10 講義時間）

講師：マイケル・パイ

〔日本語〕

講師：有本忠雄（元NHKアナウンサー）

（7）実地研修の実施

実地研修は、講義期間中に関西圏に本山・本部をもつ各宗教教団を各週に訪問する研修、および講義期間外に関東、東北、九州などの遠方地へ各年に一度訪問する研修旅行、によって実施される。また、日本のキリスト教会における研修も充実が図られ、京都・宗教系大学院連合加盟大学の大学院生との交流ももたれた。

≪2007年度秋学期≫

（1）研修

諸宗教教団施設における研修

【神社】

平安神宮（大垣豊隆氏〈前伊勢神宮教学課長〉より講義および儀礼の紹介を得る）

春日大社、手向山神社（以上奈良市内）を訪問

【仏教寺院】

東大寺および興福寺（以上奈良市内）

高山寺、壬生寺、中源寺、矢田寺（パトリシア山田氏の案内を得る）

天竜寺（トーマス・カーシュナー師から禅の実践と講義の研修を得る）

浄土宗別時念仏研修（西本明央師からの研修を得る）

西本願寺（山本浩信師からの研修を得る）

比叡山延暦寺を訪問（府上征三師の案内を得る）

【新宗教】

天理教本部およびおやさと研究所を訪問（東馬場郁生氏（天理教校講師）による研修を得る）

大本本部訪問（代表者たちによる研修を得る）

【キリスト教教会】

フランススコの家を訪問（神父による研修を得る）

（2）研修旅行

2007年度秋学期の研修旅行は関東圏で実施された。旅行には、林忠良氏が同行した。

実施日程：2007年12月15日～21日

【立正佼成会本部】（東京都）

International Buddhist Congregation RKKの萩原透公師による講義、教校校長による昼食会での講話をいただいた。立正佼成会の活動および国際事業に関して説明を受け、スタッフとの対話の機会を受けた。プログラム運営委員である林忠良氏も同行し、参加させていただいた。

【上智大学】（東京都）

礼拝堂およびカトリック辞典編纂部を訪問。ペテロ・パーケルマンズ氏より真言密教の講義、高柳俊一教授より現代日本のキリスト教の講義を受ける。

【靖国神社】（東京都）

【日本キリスト教協議会本部】（東京都）

山口里子牧師よりフェミニスト神学の講義を受ける。

【鎌倉】（神奈川県）

荒井仁師（元日本キリスト教団幹事）による鎌倉市内の神社・寺院の見学案内を得た。

（3）教会実習

3名が講義期間終了後、佐渡教会、西千葉教会、ルーテル賀茂川教会および付属保育園での長期実習を行った。内1名は、亀岡での禅修行も行った。

（4）京都・宗教系大学院連合（KGURS）加盟大学大学院生との交流

大谷大学、京都大学、同志社大学、龍谷大学で、それぞれの大学の教員である運営委員がコーディネートし、宗教研究を専攻する大学院生たちとの交流の場を設けた。また、京都・宗教系大学院連合共催の対話集会にも参加した。

4：活動の成果

活動成果の主眼目は、二点に集約される。一つには、このプログラムに参加した、将来、教会の聖職者や学校の宗教科担当教師となる学生が、自分の育ってきた宗教以外についての正確な知識を得ることによって、また同時に他宗教を実地に学び、交流・対話の機会を得ることによって、寛容な精神、宗教間相互理解の重要性の認識をもち、自己の宗教伝統への謙虚な反省心のある指導者となる研修の場を提供できたことである。

二つには、このプログラムの存在と実施自体がもたらした成果である。当プログラム実施にあたり、宗教界内外から、プログラム理念への理解と実施の協力を得ることができた。そのことによって、宗教間、宗派・教派間の信頼関係、協力関係が、さらに促進された。このことは、学生にとっては、宗教間対話・宗教間協力、そして宗教の平和的共存の現場に正しく立ち会わせていることになる。

今年度の課題として、特に研修を今まで以上に充実させることに目標が置かれた。

講義期間中の研修においては、それぞれの研修地において、見学するというだけではなく、各宗教教団の方による案内や講義、実践への参加といった非常に得がたい機会をいただくこととなり、また、その上での交流・対話の機会を恵まれた。

また、講義期間後の教会における長期実習が、今年度から正式にプログラムへ組み込まれた。

キリスト教教会が、多宗教環境にある日本で、いかに地域と関わり、また、他の宗教と関わって共に生きているかを経験する機会であった。

また、京都・大学院連合加盟大学の大学院生との交流も、プログラムへ組み込まれた。将来にそれぞれの宗教で聖職者として奉職するべく学ぶ者たちが、お互いに率直な意見を交換しあえる交流の場を設けることができた。それぞれに宗教や文化圏を異にする者同士が、しかし同世代であり、また同じ学生である立場から、現在の問題や将来の宗教のあるべき姿を問いあうことは、留学生たちにとって有意義な機会であった。

以上のように、今年度は研修のいっそうの充実がはかられた。

以下に当学期正規受講生の学生のコメントの一部を紹介したい。

「いろいろな仏教系大学生との話し合いでも、反論したり、議論したり、実存的に教えられたりしました。私が問われたのは、三一の神や処女降誕などの非論理性や二元的な神の像など、どうして信じられるのか等々です。

啓発的であったたくさんのフィールド・トリップでは、興味ある体験をし、それぞれの宗教についてきわめて具体的な認識を得ることができました。・・・専門の面からも、個人的な観点からも、是非ともこのプログラムのことを神学を学ぶ人たちに推奨して行きたいと思っています。この研修プログラムは自分自身の宗教の受け皿の周縁を見る機会を与えてくれましたし、フィールド・トリップのおかげで貴重な体験を得ました。」

(女性、ドイツ・ハイデルベルク大学学生)

「絶対的なものをこの『道』というあり方で考えるのは、日本においては戦いの術だけではなく、茶道や華道にも当てはまるし、ほとんどあらゆる活動が突然に絶対的な原理を顕すものになりえるとも言えよう。それで、ドイツの大学でふつう教えられている純粋に知的な神学(自由主義的、保守的を問わず)よりも、道という考えの方が、キリスト教の核心に近づけるのではないかという疑問も、私には生まれている。・・・

キリスト教は過去において、とりわけ古代においては、それぞれの状況で、異なる文化や哲学に対応してきたことをさまざまに示していると思う。この点においては私は日本にとっても興味をそそられる。こうした『土着化』の過程がここで始まっていて、根本的な問いや問題、たとえば人間が神のかたちであるとは何を意味するのかを、あらためて考え直してみなければならなくなっているからである。・・・もちろんこれら2つの点のみならず、心動かされたことはもっとたくさんあるが、それらすべてを語る余裕はない。ただ最後に、今回が私の最後の日本滞在でも、たぶんまた最長の日本滞在にもならないだろうということだけは記しておきたい。神学の課程を終えてから、また日本に戻ってきて、その文化や宗教をこの短い期間になし得たよりもっと詳しく学ぼうと心に決めている。」

(男性、ドイツ・ハイデルベルク大学学生)

「『どうしてヨーロッパ人たちはいつもいつも、変更を許さない規則に従うのか？ どうしてキリスト者とムスリムとのあいだにはつねに争いがあるのか、私は神式で結婚し、仏式で葬式をしてもらえるのに』とは、かつて私がドイツで、仏教の背景をもつ日本の若い友人に問われたことである。

このような、日本では現実となっているが、西洋から見れば絶対に排除し合うはずの宗教的な対立のあいだの結合が、私にこの国への大きな関心を喚び起こし、その思考方法を一度自分で体験してみたいと思った。その私がまずまったく異なる文化を理解するのに、NCCは『宗教研修プログラム』という、勉強と実地研修とが興味深く混ざった素晴らしいプログラムを提供してくれた。プログラムの広汎さだけでなく、素晴らしい授業環境もあった。私たちドイツ人4名の参加者だけだったので、すべての授業はゼミの雰囲気、十分な質問や討論の機会が与えられた。その上、諸宗教や諸専門のさまざまな国際的な講師に恵まれ、その方々がテーマや私たち学生に打ち解けた関心を寄せて下さり、優れた研究環境が作り出された。そして頂点となったのは、仏教系の大谷大学や龍谷大学、天理教、大本教、立正佼成会などの数多くのさまざまな宗教へのフィールド・トリップであった。寺院等を日本というハイテク社会の只中にある芸術的対象として嘆賞することなら旅行者にもできようが、諸宗教の関係者との話し合いが初めて私たちに、千年を越える古い伝統と活発な国際的ビジネス世界との日々の結びつきと、日本的な考え方の特徴を理解する可能性を開いてくれた。仏教者やキリスト者との出会い、知識人やホームレスの人たちとの出会いといった広がりも、日本の宗教や社会に対する深い洞察を与えてくれた。」

(男性、ドイツ・チュービンゲン大学学生)

5：今後の課題

日本の諸宗教には、それぞれに儀礼や行などのさまざまな日々の営みがある。今年度は実地研修が充実したことで、その一端に学生たちはより一層接することができた。平安神宮、仏教諸宗派本山、天理教、大本、立正佼成会では、その内容に深く触れる経験を得ることができた。また、ヨーロッパでは、仏教の行といえば禅を代表とする瞑想が知られているが、今年度は日本仏教における行のもう一方の本流である、称える（唱える）ということ、別時念仏を通じて体験することもできた。学生が彼らの感想にも記しているように、自らの宗教をその伝統の枠組みの外から見つめ直すことができるようになる、こうした実地研修を、来年度以降もより充実したものとするようになることが第一の課題である。

また、今年度は、二度、多宗教間の対話シンポジウムや会議に学生が参加する機会を得た。京都・宗教系大学院連合共催のシンポジウムと、当プログラム「諸宗教の神学および諸宗教間対話」講義内における講師たちによるシンポジウムである。学生にとっては、日本における諸宗教間の相互理解と共生が、対話という場面でどのように具体的に展開されるかを経験する事は重要である。このような機会をより増やしていくことが望まれる。